

期待した俺が馬鹿だった 究極絶望的喪失感

他大学との交流会で知り合った
清純そうで素直な女の子が
実はビッチだった
主人公ではなく筋肉ムキムキの
チャラ男の巨根を
選んでいたその女の子

新しく出来た高速道路のサービスエリア。

俺はそこでアルバイトをしている。

研修が終わり、開店したサービスエリアはとても賑わいを見せている。
もう開店から一か月が過ぎた。

網の目のように、蜘蛛の巣のように張り巡らされている大都会の中の
バイパスの、ほんの小さな一区間。ちっぽけな道の駅だ。

なのに……。

そんな小さな場所でどうして出会ってしまったんだろう？

俺はどうして見てしまったんだろう？

快晴の青空がやけに鬱陶しい。

その空の上には本当に神様なんているのだろうか？

疑わしいからこそ、晴れの日が鬱陶しい。

俺はポツリと一人、道路脇に止めたバイクの横、歩道の上に呆然と立
ち尽くしていた。

俺は……。

血眼になって追いかけたんだ……。

職場のサービスエリアで見てしまったのは、現在大学へ通っている俺
が他大学との交流会で出会った、ミヒロちゃんという女の子。

とても清純そうで素直で可愛らしい子だった。少し背が小さく、ほん
の少しだけぽっちゃりしているようにも見えたが、間違っても太いのと

は違う。肉付きが良いだけ。雰囲気はさっぱりしていて、笑顔が子供のように無邪気な子だった。

確かに・・・確かに俺はまだ告白なんてしちゃいなかったけど・・・。
だけど・・・。

「・・・だろお！？やっぱこの色が良いと思うんだよ」

「キャハハッ！さっすがあー！センスあるじゃん！」

たまらなく嬉しそうに微笑む、ほんの少し垂れ目のミヒロちゃん。頭の中が溶けてしまいそうなくらいに可愛い。

この間、俺はミヒロちゃんと一緒に繁華街の大通りへ買い物に行ったんだ。

“大学生の男女”の俺たちが、“二人きりで”だ。

もともと、ミヒロちゃんが後日行く予定の2泊3日のボランティア旅行へ着ていく服を買いに行くのに一緒に来て欲しい、という体（てい）はあったものの・・・。

それって期待していいんだよな？

たっぷり期待していいんだよな??

じゃなきゃ大学生の女の子が自分の服をかうのに、わざわざ同学年の男である俺を誘うなんてしないよな??

だけど、残酷な結果はもう出てしまっていた。

全て勝手な俺の妄想だったということ。俺は勘違いしていたのだ。

正直言うけれど。

俺はミヒロちゃんと今後どんどん良い関係になっていって、最終的には付き合えるという確信に限りなく近い気持ちを持っていた。

「ヤスユキくんってなんだか話しているととっても楽になるんだあ。胸がスーッと穏やかになるっていうかさあ・・・」

ミヒロちゃんの長い髪が、買い物帰りに一緒に歩いた川辺に拭いた風になびいて舞い上がる。とっても薄かったけれど、ほのかにカモミールの良い香りがした。たまらなく女の子っぽいと思った。

「ほんとっ！???うわあ・・・嬉しいなあ・・・」

照れた素振りを見せながら、内心は格好もつけていたと思う。

青いTシャツの後ろに隠れた背骨を、ひそかに俺はピシッと伸ばしていた。

とにかくたまらなく幸せで嬉しかった。

そして何よりもその後の展開に期待していた。

体験版はここまでです